

は、ナチスによる近代化政策は、たとえ伝統的権威を弱体化したとしても、結果としてはナチスによる民衆統制を強めただけではないか、という点であるが、西ドイツにおける最近の研究によれば、伝統的権威の弱体化に代って現われたのは、余暇の享楽と大衆消費と家庭生活への退却、政治的無関心化の促進などであって、ナチスによる民衆統制の強化ではなかった。拙著に対する批判の第二は、私が民主主義とナチス独裁との大きな相違を無視した、という点であるが、私はただドイツ第二帝政から第三帝国への支配勢力と民衆生活の連続性を主張したにすぎない。民主主義は独裁制よりも秀れているし、ナチスの無法行為や残虐性は、犯罪として徹底的に糾弾すべきであろう。しかし憎悪のあまり第三帝国の性格までを見誤ってはならない。「大きな相違」なるものは連続性の枠内で理解すべきである。なお第三帝国における上述の大衆社会現象の進展は、1950年代の西ドイツに連るもので、この点でも「大きな相違」なるものに限界がある。拙著に対する批判の第三は、私がナチス独裁は民衆生活の表面をかすめただけだと主張した、という点であるが、私は、民衆による、生活擁護のためのしぶとい努力が、ナチスによる民衆生活の破壊を妨げた事実を指摘したのである。

■ 1月25日

研究偶感——鹿持雅澄と佐佐木信綱

鴻 巢 隼 雄
(国文学科教授)

〔雅澄〕——中国古典の素養により、詩経その他の日本古典への影響を確認。土佐藩の軽格者、藩校写生字から出発し、万葉集注釈に着手、研究意識を確立、実証的成果

をあげた。真淵、宣長学批判、藩学（南学、閩齋学）批判等、近世末までの万葉学を総括した近代への仲介者である。

〔信綱〕——明治新派歌壇、鷗外の観潮楼歌会に参加。必ずしも自然主義に組みせず、歌風はむしろ白樺、スバル風の穏健清新、古典的典雅な風尚を好み、万葉集研究と歌壇活動を調和させ、竹柏会機関誌『心の花』に據って研究と啓蒙を積極的に進めた。明治45年文部省補助を受け、学会の先鞭をつけて『校本万葉集』の編著に着手、大正12—3年に完成。近代万葉学の成熟はその功績。この成熟状態を突き破る新しい研究の流れを復活させるのが今後の課題である。

いぬぼうはんせいき余聞

大 村 肇
(地理学科教授)

50年間の研究生生活を通して、専門の立場からどうしても各地を歩き廻る機会が多かった。その間偶然ぶつかったごくありふれた現象から思わぬヒントを得ることも少くなかった。ここでは特に食物について、思いつくままにいくつかを拾い上げ、それらが地域的消費性を考えるきっかけとなったこと、特に主要食料の中には古い姿を残す伝統的な地域性を想像させるもの、また意外にその変化が短い時間的経過の中でとらえられるもの、さらに新しいマーケット開発を目的とした、人為的な地域的消費性の形成といったことについてお話した。主たる研究目的の外に、副産的な資料の中にも、時には重要な示唆を与えてくれるものがあつたのではないかと反省させられる。

昭和58年度共同研究(A)分担一覧

近世における庶民信仰の動向

北村 行遠

大企業の立地に伴う下請工場の配置と

都市のコミュニティ組織の実証的研究

斎藤 昌男

工業地域の成立

大塚 昌利

量概念としての面積概念の形成

大津 悦夫